

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：15501

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13283

研究課題名（和文）現代漢族社会における親族組織とサイバー空間

研究課題名（英文）Kinship and cyberspace in contemporary Han-Chinese society

研究代表者

小林 宏至（KOBAYASHI, Hiroshi）

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：40781315

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究で明らかになった点は主に以下の3点である。1．現代漢族社会においてサイバー空間は新たな研究領域となっており、親族間の日常的な対話、金銭のやりとり、情報の共有、経済活動もウィーチャットグループを通して頻繁に行われている実態が明らかとなった。2．同じ客家というエスニックグループであっても、中国国内におけるグループと中国国外（台湾、香港、シンガポール、北米、オセアニアなど）のグループにおいて、エスニシティをめぐる言説空間が異なることが明らかとなった。3．現代中国のサイバー空間においてはテキストと同様、あるいはそれ以上に音声での交流が非常に重要であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、現代漢族社会における親族組織の在り方を、サイバー空間の利用形態から分析し、これまで祖先からの系譜や二者間の「関係」を軸に議論されてきた、父系出自を基盤とする宗族を「更新」させることにあった。新型コロナウイルスの蔓延の時期と重なったため本研究は当初の計画を大幅に変更せざるをえなくなったが、そのなかでもいくつかの重要な成果を導くに至った。それはサイバー空間が新たな親族の交流のアリーナとなっている点。アフリカ（ガーナ）の移民とも情報が同期される点。国境を超える空間と国境に阻まれるサイバー空間が存在する点などである。これらは従来の宗族観を更新するものである。

研究成果の概要（英文）：This study revealed the following three points: 1. Cyberspace has become a new field of research in contemporary Han Chinese society. It was found that daily conversations among relatives, money exchanges, information sharing, and economic activities are frequently conducted through WeChat groups. 2. The discourse surrounding ethnicity varies between cyberspace within China and cyberspace outside China (Taiwan, Hong Kong, Singapore, North America, Oceania, etc.), even within the Hakka ethnic group. 3. Oral communication is as important as written text in contemporary Chinese cyberspace.

研究分野：文化人類学

キーワード：客家 漢族 親族 宗族 サイバースペース ガーナ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、現代漢族社会における親族組織の在り方を、サイバー空間の利用形態から分析し、これまで祖先からの系譜や二者間の「関係 (guanxi)」を軸に議論されてきた、父系出自を基盤とした宗族観を、「更新」させることにある。この「更新」作業の学術的・社会的意義は、2つの重要な現代的課題と密接に関係している。13億の人口よりも多くなりつつある監視カメラと、「国民総点数化社会」となった中国社会において、サイバー空間はもはや完全に国家の管理の中にある。しかしそれでもなお、親族内のサイバー空間利用、オラリティの領域においては、極めて細かな方言を用いた音声チャットを利用し、「管理の外」のやり取りが行われていること。サイバー空間を通じて、親族間のやり取りは、アフリカであれ中国であれ、共時的・並置的に行われるようになった。これにより、サイバー空間内では団結を呼びかけつつも居住形態は分散するという現象が起きていること。本研究はこの、の課題を明確にすることで、現代中国における親族研究をサイバー空間という側面から「更新」する。現代中国における宗族を、文化人類学はもとより、他の学術領域においても適切に議論できるよう、先行研究や隣接領域において凝り固まった宗族観を刷新することにある。

報告者はこれまで福建省に点在する土楼という巨大な民間建築と、そこに居住する親族集団 (父系出自集団: 宗族) の研究を行ってきた。報告者が初めて調査地を訪れた際 (2004年)、宗族は土楼という住居に居住し続け、親族集団の集いは土楼内部の空間で行われ、祠堂での祖先祭祀 (始祖などの中心となる祖先、統合の象徴) や墳墓祭祀 (各系譜の重要祖先、分節形成の象徴) の中で親族的紐帯は確認されてきた。また報告者は、日常的な対話 (具体的には名前を呼び・呼ばれる行為)、居住空間においても親族関係を再確認する契機が存在し、それが村落内外での生存戦略 (生業の協同・仕事の斡旋) において重要であることを指摘してきた。

しかし、2010年代以降、近隣都市部への出稼ぎが増え、また急速にスマホ (ケータイ) の普及が進んだ。これにより親族内でのやりとりもこれまでと異なった様相を見せるようになってきている。まず音声チャットにより、識字の問題が解消されたこと。また、これまで細かな分節 (房) を中心に交流が行われていたが、宗族内での立場が設計上フラットになったということ、などが挙げられる。

報告者はある「家族」(日本語における一族に相当、100人規模) のグループチャットに所属し、かれらと交流をすることで現在のオンライン上の対話と日常対話の相違を調査することを想定していた。つまり、このようなチャットを介して、これまでとは異なった形で、識字 (教育・文化水準) とは無関係な形で交流、系譜、分節、房を介しての情報共有ではなく、フラットな形で情報が共時的・並置的に行われる状況を明らかにしようとした。本研究課題は、2020年度から2023年度にかけて行われる予定であったが、2020年初頭から新型コロナウイルスが蔓延することにより、中国国内での調査が絶望的な状況となり、またたとえ一時的に渡航や調査が行えるような状況になっても、いつ「ロックダウン」されるかわからないような事態に陥った。そのため、本研究課題の対象期間内において当初の研究を遂行することに大きな困難が伴った。そこで現地調査を介して行う予定であった部分は、ビッグデータの収集というように大きく方針転換を行い、本研究課題の方向性を一部変更しながら、現代漢族社会におけるサイバー空間と親族組織という研究課題に取り組むこととなった。

2. 研究の目的

本研究課題は、スマホやPCといった新たなメディア・媒体を通じて近年のサイバー空間に創られる親族的紐帯を、中国東南部における大規模宗族を事例に描き出すことにある。本研究課題における文化人類学的な意義は、親族という古典的なテーマを、新たにサイバー空間という領域から再考すること、そしてスマホやPCという2010年前後から世界規模で爆発的に浸透したモノが、宗族組織という漢族の父系出自集団内において、どのように利用され、ヒトとの関係を構築しているかを描き出すことにある。本研究課題の研究意義は主に以下の2点に集約される。

文化人類学的なメディア研究の意義

文化人類学的観点に立てば、あるモノが情報を伝えていると考えれば何でもメディアとして捉えることができる。一般にメディアというとテレビ、ラジオ、スマホ、VRなどが挙げられるが、文化人類学的な視座から見れば、手話やウイック、風や大地などもメディアとして議論される。一般にメディアをめぐる議論は、身体拡張とコミュニケーションの領域に分けて整理されるが、メディア研究において革新的であったのは、媒介される内容そのものよりも、何によって (どのようなテクノロジーによって) その内容が媒介されるのか、ということであった。つまり同じ情報であっても、何によって、誰によって伝えられるのかで情報の質そのものが変化するということになる。これまで漢族社会における親族的紐帯は、祠堂、族譜、墓といったものに媒介されてきたが、近年それがスマホにとって代わるような状況が起きているのである。

だがここで注意したいのは、われわれがメディアを介して誰かの (自分の) 情報、とりわけ文化や伝統を語る際、そこには必ず何かしら政治的な影響が働いているということである。加えて中国社会において (中国社会以外にも当てはまることだが)、サイバー空間は政府によって常に「監視」されている。そのため政府に不都合な内容はすぐに書き換えられるか、削除される傾向にあるのである。法学者レッシング (L. Lessig) の指摘がよく知られているように、サイバー空間

はそのように設計(アーキテクト)されている。しかし、後述するようにスマホが普及することでかえって電子メディアにおけるオーラルなコミュニケーションが増え、「管理の外」ともいえる交流が各地域で散見されている。

モノ研究としての意義

近年、文化人類学においてヒトとモノとの非対称性を再考する動きが活発になっている。20世紀後半における、文化人類学の研究史で言うところの「ライティングカルチャー・ショック」以降、文化を描く者の主体性、あるいは文化を創るものの主体性、そのものが問われるようになってきた。すなわち、これまでヒトを主とし、モノを客としてきた研究姿勢を改めて捉えなおすという試みが各方面で議論されている。スマホもまた、墓、家屋、位牌、廟と同様に、親族組織を考えるうえで、欠かすことのできないモノとしてとらえる必要がある。

本研究課題の目的は上述の学術的研究意義を探求することになる。この研究課題を探求する過程で、以上の2点を詳細に描き出し明らかにしていくことが本研究課題の目的である。より具体的には以下の通りである。

親族間におけるサイバー空間の利用、とりわけオラリティの領域において、どのようなやりとりが行われているかを明らかにすること。オラリティとはリテラシーに対する口頭でのやりとりであり、スマホの普及により、これまで識字問題で参与しえなかった高齢者、女性などがスマホを介して、サイバー空間に参与するようになってきている。また主たる調査地は、数キロ離れると方言が異なる、極めて多様な漢族(客家)社会であるため、その言語を理解できる人間はその地域にしかないという局所的なやりとりがなされている。そのため、世界で最も厳格な管理体制化にあるはずのサイバー空間内において、中央を気にすることのない、かなり「自由」で活発な議論が行われている。こうした実態を把握するのが本研究の目的である。

近年、中国政府・中国経済の積極的なアフリカ進出に伴い、調査地の中では少なくない若者がアフリカに移住するようになってきている。その際、スマホは僑郷との連絡において必須アイテムとなっており、一族の交流ややりとりは、スマホを介して、共時的・並置的に行われている。こうした状況を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、実際に中国東南部に居住する大規模宗族の「一員」として彼らの生活にオンライン/オフラインの両面で関与し、どのようにコミュニケーション空間としてサイバー空間が利用されているかを考察するものである。そのため現地社会における調査は必須であったが、新型コロナウイルスの影響によりほとんど現地での調査を行うことができなかった。

そのため大陸中国におけるデータのほとんどは、オンライン上にて得られたものである。オンライン上において日常的に親族コミュニティ内でどのようなやりとりが行われているかを整理した。また、現地の調査協力者と協働して、主たる調査対象以外にも、山東省、貴州省の親族グループ内のやりとりを、新型コロナウイルス発生時に限定して比較検討を行った。加えて現地調査のデータ不足を補うべく、調査対象としているエスニックグループである客家に関する全世界のビッグデータの収集を行った。具体的にはTDSE株式会社の協力のもと、Net Baseというクラウドベースのアプリケーションを利用して「#客家」に関する情報を分析した。Net Baseでは、ソーシャルデータを自然言語処理(NLP)で解析し、様々な角度で分析を行うことが可能で、現在、国内外のBLOG、ニュース記事、SNSなど3億SITEを対象としている。客家に関する情報発信は、1年間(2022年)で、約20万件確認できるが、今回の調査では分析期間を2022年8月15日から過去51か月分とし、キーワードをHakka People, #HakkaPeople, 客家, 客家人, 客家語, 客家話, Hakka Chinese, Hakka Han などとした。これにより50万件を超えるデータを入手することができた。

また中国以外の地域として、アフリカ(ガーナ)に移住した客家を追跡することにより、移民第一世代である現代華僑とスマホの利用のあり方を調査した。

4. 研究成果

研究成果として明らかになったのは以下の3点である。現代漢族におけるサイバー空間の利用状況、ビッグデータからみる国境の有無、移民社会におけるサイバー空間の重要性。以下では具体的にこれらの研究成果について説明する。

現代漢族におけるサイバー空間の利用状況

現代中国において電子メディアはさまざまな領域において欠かせない存在になっている。それは都市部、若年層のみならず、農村部、高齢者においてもあてはまる。このような状況の中で、かつては祠堂、族譜、墓を媒体として参集し、関係構築を図っていた宗族(漢族社会における父系出自集団)は、あらたにサイバー空間においてもグループを作り関係性の構築、更新を行っている実態が明らかとなった。

本来は現地のコンテキストに依存したサイバー空間の利用という点を検討することを試みていたが、2020年以降は新型コロナウイルスの影響で、本研究においてもっとも重要となる当該社会でのフィールドワークを行うことが不可能となった。そのため現地社会での調査は行えずに、サイバー空間でのみ現地社会と交流を行い、どのようなやりとりが親族内で行われているかを調査・分析した。その結果、親族内の利用において、若年層の利用以上に上位世代の利用・交流が多く、その内容も墓参の日程調整、新型コロナウイルスに関する注意喚起、親族内の訃報、

ご祝儀（金銭的なやりとり）、エンターテインメントの共有、所属団体のメンバーの勤務先での「応援活動（投票）」など多岐にわたる実態が明らかとなった。これは同時期に収集された同じ地域における非親族集団からなるオンライングループとはまったく様相を異にしていた。こうしたメディアの利用や活用状況に関しては、以下の機会などを通して発表を行ってきた。

【書籍】

小林宏至 2021 『『伝統文化』をめぐるメディア 人類学のフィールド 中国客家社会における福建土楼を事例として』藤野，陽平，奈良，雅史，近藤，祉秋編 『モノとメディアの人類学』ナカニシヤ出版 2021年3月（ISBN: 9784779515484）

【口頭発表】

小林宏至 「コロナ禍におけるローカルメディアとしての親族ネットワーク —漢族の農村社会を事例として—」北海道大学大学院 メディア・コミュニケーション研究院、2021年3月17日

小林宏至 「現代漢族社会における親族組織とサイバー空間」『国際シンポジウム 移民ネットワークとメディア』、北海道大学メディア・ツーリズムセンター、2024年3月16日

ビッグデータからみる国境の有無

本研究期間は新型コロナウイルスの影響もあり、現地調査を実施することができず、オンラインにて調査を続けることとなった。その中で調査対象としているエスニックグループである客家に関する全世界的なビッグデータの収集を行った。前述の通り、TDSE株式会社の協力のもと、Net Baseというクラウドベースのアプリケーションを利用して「#客家」に関する情報を約50万件入手した。

本研究では、まずこれまでの客家というエスニックグループとメディアをめぐる事象を整理したうえで、サイバー空間という新たな領域が客家というエスニックグループの言説とどのような関係性を有しているかを考察した。客家メディアは、1993年に台湾における客家語のラジオ放送が始まるが、サイバー空間において情報は非常に貧弱であった。1995年時点ではHGN（Hakka Global Network）と関連している客家のウェブサイトは、9件（The Federation of Hakka Association of Malaysia等）ほどしかなかった。2003年になると、台湾で客家語による客家チャンネルのTV放送が始まるが、2012年に台湾で客家委員会が設立され、オンラインでの発信が強化されるまで情報更新は限定的であった。

インターネットを介した、オンラインコミュニティの研究は1990年代のインターネット黎明期から行われていたが、1990年代における「#客家」研究は、人力でホームページを探したり、客家ネットワークにおける交流内容を分析することが多かった。2000年代に入り、インターネット上の相互交流が進み、2010年代には客家専門の掲示板のようなものも出現したため、より包括的な研究方法が求められる状況になった。そこで本研究ではWeb2.0における「#客家」空間として、サイバー空間における客家言説を調査した。そこで明らかとなったのは、「#客家」という領域においては、もはや正統な漢族の末裔といった語りや、客家語、アイデンティティなどはほとんど議論されることはなく、有名人（政治家・俳優・女優）、ポルノ系（客家とは直接関係ないが単語が含まれたりする）、食事・料理方法といったものが、客家をめぐる語りにおいては多数を占める状況が量的なデータから明らかとなった。

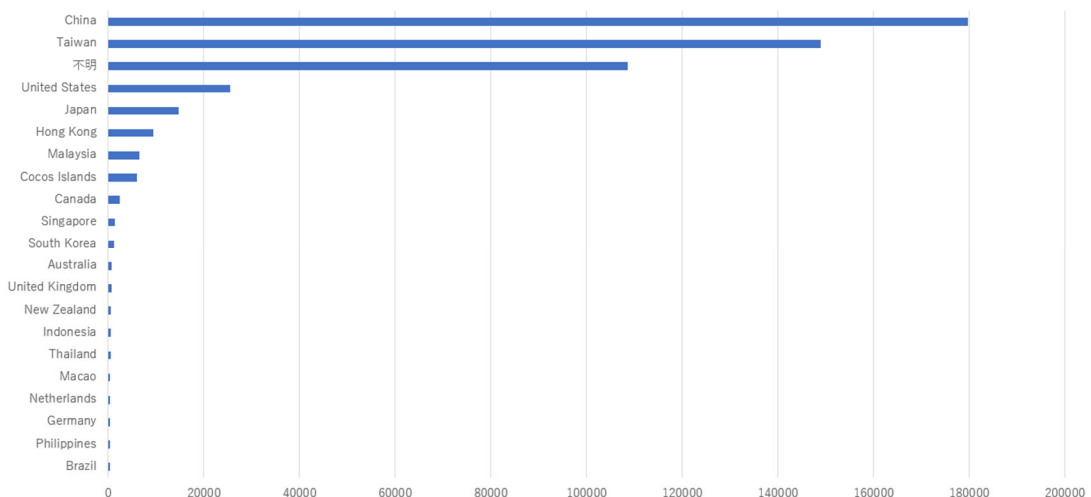


図1：対象期間中に得られた客家という単語の「国」別の出現数

日常の延長、視覚的な領域において「#客家」は現れることが多く、メディアや学術が創り上げる客家像というよりも、消費者側が「付加価値」「追加情報」として、客家というエスニックグループの表象を利用するという実態が明らかとなった。また同時に、プラットフォームごとに客家をめぐる言説が異なること、中国国内と国外とで言説空間が異なることも明らかとなった。

こうした量的データはこれまでの客家研究では明らかにされてこなかった部分であり、新たな知見を学術的にも提供することができるものである。

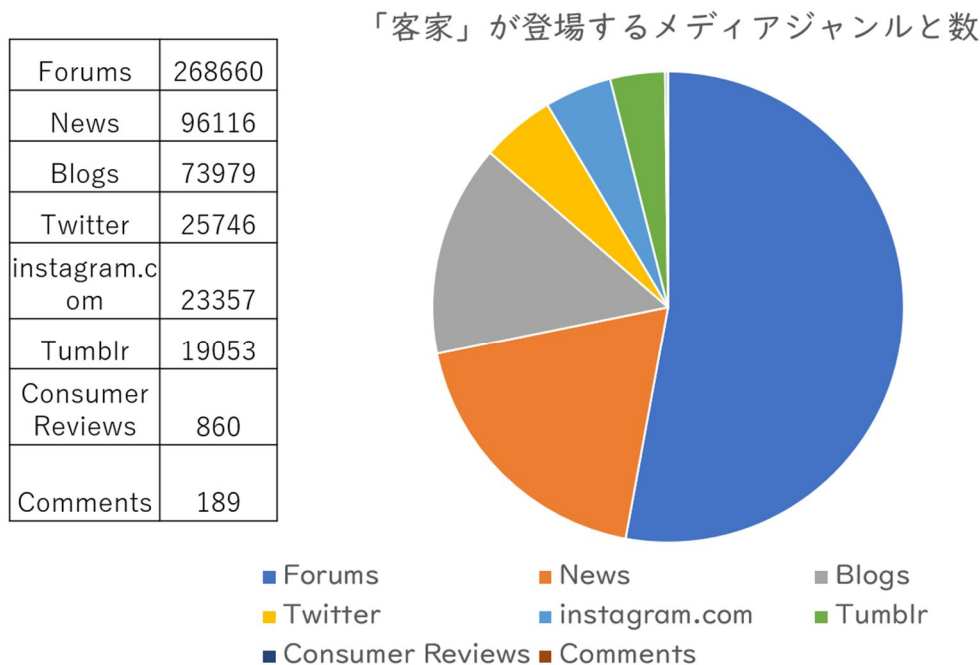


図2 : 「客家」が登場するメディアとジャンルの数

こうした研究の成果は以下の機会などを通して社会に還元していった。

小林宏至 「『#客家』という共同体 オンライン空間におけるエスニシティの現在」2022年度日本華僑華人学会研究大会分科会、神奈川大、2022年10月22日

小林宏至 「ネットワーク空間中の民族集団--以全球社会之下的客家话语为例」『世界格局变革期与东亚地区合作发展新动向』、中国山東大学、2022年11月5日

小林宏至 「オンライン空間におけるエスニシティの現れ方 2018年5月から2022年8月までの「客家」に関するオンライン言説を事例として」『山口大学・山東大学シンポジウム 東アジアの持続可能な発展と新たな交流に向けて 文化・教育・経済』オンライン、2023年6月10日。

小林宏至 「サイバー空間における『国境』の存在」公益財団法人国際宗教研究所、2023年12月2日

移民社会におけるサイバー空間の重要性

大陸中国において現地調査が行えない期間が続いたが、大陸中国からアフリカ・ガーナへと移住した客家（調査対象の親族集団）を追跡し、現代の漢族社会におけるサイバー空間の利用状況を移民という立場から考察し、明らかにすることを試みた。現在の華僑の最前線で最も重要な道具はスマホ（とネットワーク環境）であり、スマホを介して彼らは、食、人、ビジネスという順で環境を構築していく様が垣間見られた。

2020年代の移民一世は（華人）コミュニティを必要としないが、生活を円滑にするために現地社会における人間同士の信頼関係は重要である。ただそれはかつての移民とは異なり、華人である必要はないことが新たな知見として得られた。親族、親族の紹介、同級生ネットワークはサイバー空間内に存在しており、必ずしも現地社会における華人集団が彼らにとってポジティブに働くわけではないことが調査事例から明示された。彼らのビジネスはスマホを介して交渉が行われるが、たとえ言葉が通じなくても対面であること、そして飲食を共にすることが重要な意味をもつことが明らかとなった。

これまで中国からアフリカへ渡った移民は、現地社会との関わりをもち、衣食住の領域においても極力、当該社会と接点を持たないような生活様式「自己分離（self-segregation）」を有しているという語り根強がある。だが一方で、こうした見解に対しても近年反論が寄せられている。だが本研究課題では、華人社会と現地社会という「分離」ではなく、個人と「別の（華人）社会」という分離の方が、スマホを介したビジネス環境の実情に近いということが描き出された。

こうした研究の成果は以下の機会などを利用して成果報告を行った。

小林宏至 「ガーナにおける華僑のマイクロビジネス ある華僑のライフコースとオンラインネットワーク」2023年度日本華僑華人学会研究大会、2023年10月29日

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小林宏至	4. 巻 1
2. 論文標題 第八章 茂木計一郎：東京藝術大學與客家建築研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 百年往返：走訪客家地區的日本學者	6. 最初と最後の頁 191-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小林宏至
2. 発表標題 網絡空間中的民族集團--以全球社会之下的客家話語為例
3. 学会等名 世界格局变革期与東亜地区合作發展新動向（中国：山東大学）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林宏至
2. 発表標題 「#客家」という共同体 オンライン空間におけるエスニシティの現在
3. 学会等名 日本華僑華人学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林宏至
2. 発表標題 新型コロナと宗族
3. 学会等名 危機のメディア研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林宏至
2. 発表標題 コロナ禍におけるローカルメディア としての親族ネットワーク：漢族の農村社会を事例として
3. 学会等名 コロナ時代における新しい「つながり」の研究（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 飯島典子、河合洋尚、小林宏至 原著；周俊宇 中譯	4. 発行年 2021年
2. 出版社 客家委員會客家文化發展中心、南天書局有限公司	5. 総ページ数 330
3. 書名 客家 歴史・文化・印象	

1. 著者名 藤野 陽平、奈良 雅史、近藤 祉秋、小林 宏至	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 280
3. 書名 モノとメディアの人類学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関